黒地の布に感情乗せ

第7回 絹谷幸二賞

若手画家の創作活動を応援し、具象絵画の可能性を開くことを目的にした第7回絹谷幸二賞（毎日新聞社主催、三井物産協賛）は、谷原菜摘子さん(26)に決まった。奨励賞には久松知子さん(23)が選ばれた。贈呈式は3月16日、東京都千代田区の学士会館で行われる。【岸桂子】

「汝、如何にして其の罪を償わん」 2014年

谷原菜摘子さん

「尊敬している先輩方が過去に候補に挙がっていたので、私もいつかこの賞にノミネートされるよう頑張ろうと思っていました。それが受賞だなんて、今でも信じられません」。大きな目で驚きを表現する。

作品の大きな特徴は、油絵の具を乗せる支持体が、一般的なキャンバスではなく黒のベルベットであることだ。

たにはら・なつこ 1989年埼玉県生まれ。京都市立芸術大学大学院絵画専攻油画在籍中。兵庫県芦屋市在住。 ＝森園道子撮影

幼少期、「紙にパステルで描いた時の確かな手ざわり」が体に残っている。その感覚はいつしか得られなくなり、京都市立芸術大学時に専攻した日本画の和紙も、2年で油画に転向してからのキャンバスも、「壁を感じていました」。

3年の時、指導を受けるサイモン・フィッツジェラルド教授の助言もあり、「キャンバスである必要はない」と布屋へ。すぐにベルベットの柔らかな質感にひかれた。

一筆おいた瞬間に「目が覚めました」。起毛しているから描きにくいのですが、ひっかかりが感情表現に好都合でした。

身体感覚に忠実になる姿勢は、絵のテーマ設定にも通じる。「自分だけの世界」として「夢」は大事なテーマ。忘れないように、夢日記もつけている。

さらに「感情の起伏が激しい」と自己分析し、「残酷さや非情さを併せ持つ、人間の『業』にも迫ってきた。動物実験や虐待事件、戦争などを取り込むが、確かな構成力もあって、グロテスクには見えない。鮮やかな色彩表現は、テキスタイルデザイナーの母の影響もありそうだ。「美しくない絵は意味がないと思っています」と断言する。

受賞にも浮かれる気配はない。「これからが勝負」と前を見据える。3月3日に京都のギャラリー16で始まる個展をはじめ、今年は発表の機会も多い。昼夜続けての創作は続く。

愛憎の世界 超越図る

日本を代表する画家の一人で、文化功労者の絹谷幸二さん＝写真＝が2008年、毎日新聞社に呼びかけて創設。絹谷さんは1974年、当時具象絵画の登竜門といわれた安井賞（本社主催、96年度の第40回で終了）を31歳で受賞。画家として生きていく自信を得た体験を伝えたいと思い立った。後進の指導にも力を注ぐ。東京芸術大学教授、大阪芸術大教授。日本芸術院会員。

対象は35歳以下の画家。国内で前年に開かれた展覧会などで発表した、具象的傾向の出品絵画を選考。賞金は本賞100万円、奨励賞50万円。

横4・30メートルの集団肖像画は、東北芸術工科大（山形市）の卒業制作。発表当時、東京でも話題を呼んだ。岡倉天心や横山大観らの近代の巨匠だけでなく、会田誠さんや村上隆さんら現代美術家、さらに高階秀爾さん

「日本の美術を埋葬する」 2014年

奨励賞 久松知子さん

ひさまつ・ともこ 1991年三重県生まれ。東北芸術工科大大学院修士課程 芸術文化専攻日本画領域在籍中。山形市在住。

震災直後の春、同大教授の画家、三瀦夏之介さんが主導する有志の研究会「東北画は可能か?」で、絵画の共同制作に参加した。「メンバーと絵画論議を重ねただいた批評の意味がかみ合わなかったのです」

高校まではこれ、院展に入選できる伝統的な日本画を目指していただが、大学で会田さんらの現代美術に衝撃を受けた。

「うれしく、同時にホッとしました。好き勝手に面白がられて終わることも覚悟していたので。言語化できないから絵にしていた身にとって、言葉をいただけることは最高の幸せです」と満面の笑みがこぼれた。

構図の原本は、近代フランスの画家、クールベの「オルナンの埋葬」。無名の庶民を描くことで、歴史画を否定した大作だ。並々ならぬ決意がうかがえる。

転機は4年前。東日本大震災直後の春、同大教授の画家、三瀦夏之介さんが主導する有志の研究会「東北画は可能か?」で、絵画の共同制作に参加した。「メンバーと絵画論議を重ねただいた批評の意味がかみ合わなかったのです」

高校までは、院展に入選できる伝統的な日本画を目指していただが、大学で会田さんらの現代美術に衝撃を受けた。

「うれしく、同時にホッとしました。好き勝手に面白がられて終わることも覚悟していたので。言語化できないから絵にしていた身にとって、言葉をいただけることは最高の幸せです」と満面の笑みがこぼれた。

「尊敬している先輩方が過去に候補に挙がっていたので、私もいつかこの賞にノミネートされるよう頑張ろうと思っていました。それが受賞だなんて、今でも信じられません」。大きな目で驚きを表現する。

作品の大きな特徴は、油絵の具を乗せる支持体が、一般的なキャンバスではなく黒のベルベットであることだ。

幼少期、「紙にパステルで描いた時の確かな手ざわり」が体に残っている。その感覚はいつしか得られなくなり、京都市立芸術大学時に専攻した日本画の和紙も、2年で油画に転向してからのキャンバスも、「壁を感じていました」。

3年の時、指導を受けるサイモン・フィッツジェラルド教授の助言もあり、「キャンバスである必要はない」と布屋へ。すぐにベルベットの柔らかな質感にひかれた。

一筆おいた瞬間に「目が覚めました」。起毛しているから描きにくいのですが、ひっかかりが感情表現に好都合でした。

身体感覚に忠実になる姿勢は、絵のテーマ設定にも通じる。「自分だけの世界」として「夢」は大事なテーマ。忘れないように、夢日記もつけている。

さらに「感情の起伏が激しい」と自己分析し、「残酷さや非情さを併せ持つ、人間の『業』にも迫ってきた。動物実験や虐待事件、戦争などを取り込むが、確かな構成力もあって、グロテスクには見えない。鮮やかな色彩表現は、テキスタイルデザイナーの母の影響もありそうだ。「美しくない絵は意味がないと思っています」と断言する。

受賞にも浮かれる気配はない。「これからが勝負」と前を見据える。3月3日に京都のギャラリー16で始まる個展をはじめ、今年は発表の機会も多い。昼夜続けての創作は続く。

■選考過程 独自性を評価

毎日新聞社が、若手画家の作品に詳しい全国の美術館学芸員や美術評論家、ジャーナリスト56人に推薦依頼を発送。34人から回答を得た。候補として推薦されたのは22歳から35歳までの30人（うち4人はそれぞれ2人から推薦）で、女性が22人を占めた。

候補者にポートフォリオ（経歴や作品写真をまとめたファイル）を送ってもらい、事務局が選考委員3氏に発送。選考委員はそれらを精査し、開催中の展覧会で作品を鑑賞可能な場合は、足を運んで実物に接した。

1月中旬の1次選考は、各委員が気になった画家を挙げるところから始まった。全員が興味を示したのは、谷原と久松。その後、全候補者について議論を重ねた。

評価の基準になったのは、オリジナリティーや、画面に表れる技法の説得力。また、「絹谷幸二賞は、受賞者以外の若手画家にもハンチャンはあるよと勇気を与えられるような存在であるべきだ」という賞の性格もたびたび確認され、挑戦意欲も論議された。その結果、先の2氏に加え岡柏優護、三井淑香の計4氏が次選考へ進んだ。

実作品を見た事がない候補者について、選考委員が候補者の創作現場を訪問。2次選考までに実作品をチェックした。

2月初旬の2次選考でも、最初に名前が挙がった人を挙げた。ここで谷原、久松、三井に絞られたが、谷原と久松の優位は変わらず。素材を熟慮し、独自の世界をつくっている谷原がその賞となった。三井も密度の高さで評価されたが、一歩及ばなかった。

◇推薦された人たち

赤松亜美、淺井裕介、生島宣、今井麗、瓜生祐子、衣川明子、興梠優護、児玉香織、後藤拓明、小西紀行、衣真一郎、高松明日香、武内明子、中園孔二、箱崎泰美、蓮輪友子、久松知子、風能奈々、堀江栞、堀川すなお、三井淑香、守屋亜矢子、八頭司悠、山内望起子、横野明日香、吉岡千尋

◇回答を寄せた推薦者

尾崎信一郎、翁長直樹、OJUN、加藤義夫、川淵千鶴、岸桂子、黒田雷児、児島やよい、小松崎拓男、坂本顕子、渋沢和彦、清水有香、正路佐知子、角奈緒子、高階秀爾、竹口浩司、徳山拓一、中井康之、名古屋覚、西澤美子、野地耕一郎、土方明司、藤田一人、藤本真帆、保坂健一朗、堀元彰、本田代志子、牧野裕一、三井知行、宮本武典、村田真、山口裕美、山中俊弘、和田浩一、50音順、敬称略

ただならぬオーラ実感

明治学院大・山下裕二教授

真っ黒な背景からぬっと現れて、異様なふるまいを見せる女性たち。谷原菜摘子さんの作品を画像ではじめて見たときから、ただならぬオーラを感じた。その後実見して、ベルベットに油彩で描かれていることを知り、試行錯誤の末にあふれるような想念を画布に定着させるこの方法を獲得したのだと了解した。土俗的シュールレアリスムともいうべきオリジナリティーを高く評価したい。

久松知子さんは、日本近代美術史を十全に咀嚼した上で、美術史そのものを絵画化するという、これまでありそうでなかったテーマに取り組んで、モニュメンタルな大作に結実させた。クールベの作品の構図を下敷きに、岡倉天心、横山大観から、現代の画家、評論家までを配した集団肖像画は、二十一世紀初頭の美術をめぐる状況をしっかり映し出す鏡のような作品だと思う。

■選評

視覚通じ触覚にも訴え

大阪電気通信大・原久子教授

初めて谷原菜摘子さんの絵を見た時、目の前に閃光が弾けるような衝撃に見舞われた。恐怖感を覚えるような世界が描かれているのだが、きらびやかなディテールに視線を奪われ、好ましからざる光景を受け入れさせられてしまった。漆黒のベルベットの柔らかな光沢の上に描かれた絵画は、視覚を通して強く触覚にも訴えかけてくるもので、他の若手の作品にない独自性が確認できた。

久松知子さんは、日本の美術が近代化する中で生まれた「日本画」と泰西名画をなぞらえつつ答えを求めようと対峙して、谷原さんとは好対照の作品展開だ。岡倉天心以来の日本美術の系譜をめぐる彼女の視線を、実直に描いている姿勢は、ひとつの時代の節目に大事な行為として評価されるべきだろう。

あらゆるメディアを選択できる現在、絵画表現を通して自身が描くべきものを見いだし、確信を持って絵筆をとる彼女たちを称賛したい。

自身の声に耳傾けた

美術家・鴻池朋子さん

谷原さんの絵の画布はベルベットの布。この深い光沢感をもつ漆黒の闇にめぐり合うまでに沢山の画材を試したそうである。作家にとって何の素材を使うかは、何を描くかよりも身体的に密接に繋がっていることで重要なことだ。自身の奥底からの声に真摯に耳を傾け、手芸するように絵を描く女の子の手の喜びが力強い画力と共に迫力で伝わってくる。そもそも明治期に油画が輸入されてから、何も疑わずにキャンバスに絵を描いてきたこと自体が不思議だ。

期せずして久松さんもその時代にさようならと語っている。現存を批判する風刺的作風自体は伝統的な芸術表現であるのだが、大勢の大人たちが木々のように立つ美術の森の中で一人ぽっちで彷徨う作者はまるで小さな赤ずきんである。名々の顔がとてもよく描けているので、ふと全員を裸にしてもよかったかなと思った。